派遣先所属　　岩手県保健福祉部地域福祉課　　氏名　宮寺　修也
派遣期間　　平成２４年１０月１日～平成２５年３月３１日

## １　派遣業務の内容、現況

東日本大震災発生後、多くの人が避難所で過ごすことを余儀なくされました。避難者の中でも、要介護高齢者などの要援護者に対する福祉的支援体制について多くの課題が残ったと言われており、その見直し・改善が私の担当業務です。その意味で、災害関連業務ではありますが直接の復興関連業務というわけでなく、震災の反省を生かし今後に備える業務ということになります。

- 認知症高齢者、知的障がい者、乳幼児など、特別な配慮が必要な人たちと一般の被災者が同じスペースで過ごすことが困難になり、やむなく車内で寝泊まりせざるをえない家族もあるなど、弱い立場の人ほど避難生活の負担が大きかった。
- 介護専門職の支援を必要としたが、派遣までに時間を要したため、要介護者のいる家族の負担が大きかった。避難所内でボランティアを募ってみたものの、多くは介護経験がない人であったため、継続した介護が困難であった。
- 避難所における避難者のプライバシー確保やトイレの適正配置など、避難環境の整備が遅れた。

※岩手県内福祉関係職能団体等により岩手県知事宛に提出された「災害派遣福祉チーム」の組織化に向けた要望書の中の「要望の前提となる課題認識」の箇所から引用。

震災関連の一般的な報道では伝えられることが少ない分野の問題である一方、被災者一人一人の尊厳に関わる非常に大事な問題です。災害時要援護者の避難先として指定される「福祉避難所」の事前整備、また避難所支援の経験や訓練を積んだ福祉・介護等の専門職メンバーによって構成されるチームの発足準備などを主に担当することで、状況の改善に取り組んでいます。

具体的な担当業務の一つとしては、岩手県立大学と協働で行っている福祉避難所に関する研究があります。県内市町村担当課、また実際に福祉避難所として開設した施設向けにアンケート調査を実施して取りまとめたり、ヒアリング調査を実施して当事の状況を聴取して整理することで、今後の県の施策に生かしていくことを目的としています。

こういった類の業務をお手伝いさせていただいていて感じるのは、業界の枠を越えた各関係機関の連携の難しさと、記憶の「風化」への恐れです。

災害派遣福祉チーム設立に向けた有識者懇談会の様子

震災時に要援護者、またその家族が経験した苦労は私の想像をはるかに超えるものでありましょうし、二度と繰り返してはいけないものであるはずなのに、要援護者を支える体制の構築が発災後１年半以上が経つにもかか

わらずなかなか進まないのは各関係機関の連携の難しさがあります。誰もが体制を整備しなくてはならないと感じているにもかかわらず体制を整備するには業界の枠を越えた関係者の綿密な連携が必要で、福祉関係者、医療関係者、民間福祉施設、行政機関などなど、十分な体制を築くために協力が必要な関係機関はあまりに多いです。実際に業務で関係する会議にいくつか出席させていただいていますが、関係者の目指すところは全く同一なのに、それを調整して一つの動きにしていく難しさを出席するたびに感じます。

「風化」というのは被災地以外に住む人たちだけの記憶の風化ではなく、被災地に住む人たちの記憶の風化も含みます。震災はいつ起こるか分からず、起きるまではそのリスクを肌で実感できないというのが震災関連業務の難しいところです。今現在起こっている困難、今後確実に起こりうる困難に対しては人は緊張感を常に持って対策を進められるものと思いますが、今後起こる「かもしれない」困難に対しては同じくらいの緊張感で持って対策を進められないのが人の常であるように思います。

この報告書の存在が、決してスポットライトを頻繁に当てられる分野ではないけれど極めて重要な災害時要援護者対策という分野への関心上昇に少しでも寄与できることを願います。

## ２　復旧･復興状況や被災地での見聞・感想

担当業務は盛岡の県庁舎の中からの後方支援が中心となるので、沿岸部をはじめ県内出張の機会は多くはないのですが、週末などを利用し県内は色々と回りました。私は１０月からの派遣なので雪が降る前に、特に沿岸部は回れるだけ回っておこうと思って、この報告書を書いているのはちょうど任期の半分を過ぎたところではあるものの沿岸部には既にプライベートだけで６回行きました。入庁時から一緒の埼玉県の同期で、４月から岩手に派遣されている者がたまたまおりまして、彼に連れられなんと岩手に着いた翌日には既に陸前高田の地を踏んでいました（彼の担当業務の１つが被災沿岸部でのイベント運営なのですが、自分の担当したイベントを視察に行くため休日返上で頻繁に沿岸部に足を運んでいるようで、せっかくなので私も一緒にということで)。

**沿岸部の大槌町で子供と遊ぶボランティアに参加。真ん中は大人げなく点数をとり喜んでしまっている筆者**

津波被害の爪跡はいまだに筆舌に尽くし難いものですが、人の温かさだったりたくましさだったり、食材の豊かさだったり観光資源の豊富さだったり、行く度に三陸地方の良さをしみじみと感じて帰ってくることができるのもまた確かです（個人的には宮古市浄土ヶ浜がイチオシです）。

数多くの関係者が様々な形で復興支援に関わっていることも、現地に足を運んだからこそ実感できました。プライベートで参加した沿岸部ボランティア参加から御縁が繋がり、現地で活動する様々な NPO の方たちの話も聞け、県庁舎の中からでは分からなかった被災地のリアルな現状、多様な支援の在り方にも触れることができました。

１回目は同期と、２回目は一般社団法人 SAVE IWATE さんと（ボランティア参加）、３回目は同じく関東地方の自治体から沿岸市町村に派遣されている方と（各地の祭りを観に）、４回目は大学時代の友人と（遊びに来てくれたので御案内しました）、５回目はミュージックセキュリティーズ（株）さんが主催する復興応援ツアーで（半分寄付、半分投資の仕組みで被災地の企業を応援する事業を行っている企業です）、６回目は同じく SAVE IWATE さんのボランティアで、沿岸部を回りました。

沿岸部を回ったこと自体が直接業務に反映できる場面は多くはありません。ただこれら全ての出会いから学んだことが自分の糧になっていると感じ、感謝しており、そして今後に繋がっていくものと思っています。

**大槌でのボランティアの様子。サンタを取り囲む子供たちの図と、なぜか追われるサンタの図**

**休日、平泉にて。某課の課長さんの素晴らしいガイド付きで回ることができました。一緒に回った方はそれぞれ東京、大阪、山口からの派遣の方々。今回だけでなく、幾度にも渡って、全国から派遣でいらしている職員のためにご厚意で県内を御案内していらっしゃるとのこと。感謝と敬意の念に尽きません。**